

国史纂集

第14号

1990年9月15日発行
別府大学文学部
日本史研究室
〒874別府市北石垣
電 (0977) 67-0101

「二神一仏一業」から多角経営へ

後藤 重口

日本の神の数は俗に八百万と称され、仏の数もまた無数に近いものだった。これらの神や仏は、本来それぞれ専門とする技能をもっているものと考えられていた。

宮崎市郊外に鎮座する生目神社の御祭神は眼病専門、大宰府天満宮は学問の神様、出雲大社は縁結びの神として、多くの人々に崇敬され続けってきた。手足の病を司る足手荒神、耳の病を司る聾神王様、さては子供にヒキツケ、婦人の持病を専門にする神もあれば、牛馬の健康管理を

なさる神、水の神・火の神・山の神・道の神・風の神・作の神等数えはじめたら際限がない。

仏と同様、阿弥陀如来は、西方極楽浄土にいらして、死後の人々の世話をなさり、東方薬師如来は、人々の現世の苦悩を解消していただけている仏であった。

近代医学が発達する以前の永い間、これら神や仏は、いわば、小児科・産婦人科・外科医・獣医師農薬技師等の役目を果たして来た。そしてそれは、神仏ばかりではなく、たとえ

目次

◆「二神一仏一業」から多角経営へ・後藤重口 ◆『サンカ研究』を読んで・藤井綾子 ◆家船のアワビ採集について・吉田美加 ◆民俗資料における民衆

の知恵・森藤由美子 ◆『百姓伝記』にみる鉄鎌に関する諸説・花田直樹 ◆熊本県における近代初期の百姓一揆・茂藤秀相 ◆「記録井間書扣帳」を読む・清水勝 ◆「庄内地理志」・佐々木綱洋

ば人の商売においても然りであった。

魚屋・綿屋・紙屋・下駄屋・靴屋・豆腐屋・鍛冶屋・桶屋。それは扱う商品や技術の専門を尽くして商うものであり、まさにエキスパートそのもので、誇りを以て作り・販売したのであった。勿論、なかには「万屋」(よろずや)もありはしたが、それはもの数ではなかった。

神社の祭神は、歴史的には永く、特殊な例を除く以外、原則として一神が祀られるのが普通であった。明治初期、国策による神仏分離、小社合祀によって、一社に多神が祀られることになり、主体となる祭神の影が薄れて行った。奈良県吉野町の吉野川上流に鎮座する丹生の川上三社

は、古くから水神として崇敬され、

天下に日照りや長雨があると、朝廷は弊使を派遣して祈雨・止雨を祈念させ、祈雨には黒馬、止雨には白馬を奉納したことで知られる。京都市を流れる鴨川の水源地・貴船町に鎮座する貴布祢神社も、祭神を「オカミ」とし、これは水神であり、川上社と同様の崇敬を集めていた。これらの神は、水利担当の専門神であり、これと水に關しては他神を寄せ付けぬエキスパートであった。しかし、近代、これら神々も専門分野だけでは、なかりわいが立ちにくくなったものか、「万屋」式の神業を用いるようになった。所謂「経営の多角化」である。町中を走り回っている自動車に、

大宰府天満宮は交通安全守護札を、そのほか、様々な効能書のお札をお授けくださっている。

大きな神社の奉納絵馬の内容を見ると神への願いの種類がいかにも多いか歴然としよう。しかも、それを神様は快くお聞き入れのようである。

地方の小村に小規模ながらもスーパーショップが誕生し、都市部の商店は大型店化して昼夜の区別なく営業し、単科の専門医院が、総合病院となつて、どんな病種の患者でも、診療・加療するようになった今日の

こと、神様も頑なに旧慣を墨守して専門ばかりを看板になされていることがかなり困難になられたらしい。専門の一業から、多角化経営に方針を代えられた事情は、この辺にあるらしい。

しかし、すべての神々が、専門神業を捨てて、多角経営に乗り出したのではない。地方には、未だに素朴なホコラで、飾り気もない看板のものと、目・耳・手足・胸、疣などの皮

膚の病気の治癒に評判の「神様医院」は決して少なくない。そしてそれが、結構流行っているから不思議である。面白いことに、こうした神々は、その「内証」の程は推し量れ得ぬが、その古びた看板を一向におろそうとなさらないし、そこを訪れる患者も、一向に減る気配がない。

「民間信仰」の研究は、こうした観点をもとに出発するのであるが、それは同時に、日本社会史の研究にとつて、かけがえのないフィールドでもある。明治中期は、産業構造体系が、大きく変質する時代であり、その認識のもとに日本民俗学の誕生がある。現代は、ミクロとマクロとが、相乗する社会。新民俗学観・新歴史眼に立って、歴史の変化を認識しなければなるまい。「関東御成敗式目」の第一条に「神は人の敬いによって威を増し、人は神の徳によって運を添う」とあり、人と神とは、相乗的な関係にあることを強く説いている。

人社会・神社会の変化も、当然相乗的に変化する。諸神が一業主義から多業主義に、神業を変えつつある事情は、十分に理解出来る。

歴史研究は、史料の考証を以てな

す至上とする文献考証史学から一歩進み、アナール学派的な心性史をも組み込んだ、新しい史観をもって取り組まねばなるまい。

(文学部教授)

『サンカ研究』

田中勝也著
新泉社

を讀んで

藤井 松枝子

三角寛の言われる、サンカ小説、

である。

少女時代に読んだ記憶がある。のち、大分県に住むようになって、この人が竹田出身であることを知り、なつかしかった。ところで三角氏はサンカ世界を小説に描いただけでなく、学術研究の対象ともし、その研究で博士号をとったのだ。田中勝也著『サンカ研究』は、この三角氏の学位論文を根幹資料とし、それに田中氏が自身の主要テーマとして取り組んできた『上記』の研究成果を絡ませて、立論、上梓されたものである。『上記』—これまた、わが大友初代能直によって編まれたことになつており、その揃った古写本は、唯一大分県立図書館に所蔵されているところの、有名な、偽書である。が、これはほんとうに、偽書か。『上記』は古代文字で書かれている。その古写本を、わたしはそのまま読めるでもないの、吾郷清彦現代語訳(霞ヶ関書房)で読んだ。どこまで読み取れたかわからないが、そのかぎりという、ともかくこの